

〔実践研究〕

広域博物館等施設の効率的経営方策に関する考察 ―「教育活動」と「経済活動」の両立の視座から―

牧 野 祐 也

(木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド)

はじめに

本稿は、北海道網走支庁管内の遠軽町^{えんがるちょう}及び上湧別町^{かみゆうべつちょう}の博物館等の文化施設が行った事業「学芸員がフィールドへ飛び出した・遠軽まるごと博物館」の実践を通して、博物館における「教育活動」と「経済活動」の両立方策の事例について分析したものである。

現在、博物館等の文化施設においては、ごく一部を除いてそのほとんどが利用者数の減少という状況にある中で、行政の財政難を主な理由とする指定管理者制度が導入され、サービスの改善よりも利用者数の増加を図る活動を優先しなければならないというのが実情である。

遠軽町に設置されている「木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド⁽¹⁾」(以下「当館」という)は、町の第3セクターが事実上の経営を行い、平成10年の開館以来、入館者数を増やすことを最優先に活動を行ってきた。利益追求が目的の第3セクター(株式会社)の経営であるため当然のことであるが、今後、活動をいわゆる「量より質」と考え、利用者数増加よりも教育的内容の充実、特に地元住民に対してはそのことに主力を注いできた多くの公立の博物館等施設においても、「利用者数」を評価の中心に位置づけ、経済活

動を優先せざるを得ない動向にある。

一方で、学校教育における総合的な学習の時間での利用、生涯学習社会の中での博物館教育の需要拡大、国民の余暇の増大、娯楽の多様化など、博物館の教育力への期待も同時に増しているという状況にあって、これらについても成果を上げることが求められており、特に過疎化が進む地方の博物館は、上記のジレンマを抱え試行錯誤の状態に置かれている。

このような状況を打開するため海外に目を転ずると、各国で様々な取組が行われている。その中でもイギリスにおける取組について、多くのミュージアム・マネジメントを手掛けてきた塚原正彦とロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館教育部長であるデヴィット・アンダーソン（David Anderson）が、いくつかの事例を報告している⁽²⁾。イギリスでは、既存の博物館・美術館等の施設だけではなく、その地域の伝統や文化等を含めた自然・風景・ブランド店等を貴重な資源と位置付け、さらに住民が一体となってミュージアム都市化へ動くことにより集客数を上げて成功している。

しかしながら、我が国においては、これほどまでに成果を上げている例は見られない。その背景としては、我が国において「経済活動」と「教育活動」とは対極にあるものとして考えられてきたということがある。しかし、現在の我が国の博物館、特に当館のような過疎地域においては、集客数を増加させ収益を上げるという「経済活動」の成果が上がりなければ、博物館は「ハコモノ」として税金の無駄使いの象徴として捉えられてしまう危険がある一方で、利用者の様々な学習欲求に応える「教育活動」ができなければ、その本来の存在意義が無くなってしまうという状況にあり、この2つの成果を上げることがいわば至上命令であり、それが出来なければ生き残れないという厳しい状況に置かれている。

そこで、この双方を対極にあるものとして捉えず、両立させる方策として「遠軽まるごと博物館」事業を開始した。事業の詳細については後述するが、従来の博物館同士の連携に留まらず、町内の博物館同士が連携した上で、旅行を専門とする民間企業と提携して立案から評価までを協働で事業を推進することとし、これまでのような単なるツアー誘致だけではなく、遠軽地域の課題であった通過型観光から滞在型観光へ⁽³⁾の発展も視野に入れた新しい試みの事業である。

I 研究方法

この章では「経済活動」と「教育活動」についての定義に加え、事業の分析方法を述べる。

まず「経済活動」についてであるが、これは博物館等の施設が集客数を増加させ入館料収入を上げることを目的にした活動だけを指すのではなく、利用者、特に遠方から人々が博物館等施設を訪れることによって地元の宿泊施設、商店等の収益を同時に上げることができる複合的活動を意味する。そうしたことから本稿で述べる経済活動とは、地域住民を対象にした活動ではなく、札幌市近郊を含む大都市部の利用者を対象とした活動である。

一方「教育活動」とは、博物館等の施設利用者の多様な学習欲求に応えるための活動を指すのは当然であるが、本稿では特に、都市部の親子を対象とした遠軽地域独自の体験型学習の魅力的なプログラムによる学習活動のことである。これは遠軽地域内にある博物館等施設が、それぞれの特性によって異なる内容の体験学習を持ち寄り、株式会社 JTB 北海道（以下、「JTB 北海道」という）と協働で内容を検討・精査し、一貫性のあるプログラムとして提供するものである。

次に「教育活動」成果分析方法は、主にツアー参加者の満足度を調査するために行ったアンケート調査である。当事業は継続性を担保するためのモニターツアーであり、参加料もモニター料金として1人5,000円と、一般のツアーよりもはるかに安価に設定した。そのためモニターツアーであることは募集の段階から参加者に周知徹底しており、アンケート調査へ回答することを参加条件とした。アンケートの内容については、JTB 北海道市場開発室が中心となって作成した。このアンケートは、参加した保護者と児童に対しそれぞれ別の内容を用意し、また事前と事後に実施した。

次に経済活動の成果についてである。前述した通りモニター料金は1人5,000円と設定したが、当然それで全ての経費を賄えないので、不足分は主催者である NPO オホーツククラスター湧別川流域研究部会⁽⁴⁾（以下、「クラスター研究会」という）の補助金で補充した。それらの点を考え、全3回実施したモニターツアーの各回において、遠軽地域全体でどれだけの収益があっ

たかを踏まえ、アンケート結果を元に本格的なツアーの実施に向け、参加料の設定を行い、それが遠軽地域にとってどれだけの経済効果があるのかを検討した。

II 実施地及び実施施設の概要

本研究の対象である「学芸員がフィールドへ飛び出した 遠軽まるごと博物館」の実施地は、北海道の遠軽町^{えんがる}及びその隣町^{かみゆうべつ}の上湧別町である。

遠軽町は、平成17年10月1日をもって旧白滝村^{しらたき}、旧丸瀬布町^{まるせつ}、旧遠軽町、旧生田原町の4町村が合併して新しい遠軽町となった。世帯数10,935、人口23,602人（平成19年1月現在）、面積は1,332.32平方km、東西に約90km、南北に約88kmである。行政区画としては、旧遠軽町に該当し、旧遠軽町役場を本庁とする遠軽地区と、旧白滝村、旧丸瀬布町、旧生田原町に位置する旧町村役場を支所として、それぞれ白滝地区、丸瀬布地区、生田原地区となっている。丸瀬布地区、生田原地区は林業が盛んだったが、現在は衰退して町の基幹産業と言えるまでの規模はない。しかし、丸瀬布地区にある北見木材株式会社は、国産ピアノの響板、鍵盤板の3分の2の製造量を誇っているなど、町内の内陸側の山林には日本国内でも屈指の良質とされる木材が豊富である。また、遠軽地区には陸上自衛隊旭川第2師団第25普通科連隊の駐屯地があり、町の経済を支えている。

遠軽町には、旧町村時代に建設された博物館施設、遺跡、文化施設等（以下、これらを「博物館等施設」という）がある。白滝地区は黒曜石の原産地として有名であり、毎年道内外を問わず大学を中心に発掘チームが調査に入っており、一般公開もしている。遠軽町役場本庁と白滝支所の教育委員会に、考古学専門の担当者がそれぞれ1名配置されている。丸瀬布地区は昆虫の里として知られており、丸瀬布昆虫生態館（以下「昆虫館」という）が中心となって、昆虫に関する調査研究、昆虫を題材にした教育機会を提供するなど、学芸員1名を配置している。遠軽地区には、白滝遺跡の出土品を中心テーマとする先史資料館と、遠軽町の歴史をテーマとする郷土資料館があるが、この2つには専属職員は配置されていない。そして生田原地区には、旧

生田原町時代に建設された当館がある。世界40ヶ国の木のおもちゃを収集展示しており、木のおもちゃの文化を通して、知育玩具の普及や木工の技術を広く普及する活動を行っている。専属の指導員を配置した木工房では、小学生から大人まで木工体験が行えるようになっている。

一方、上湧別町は、いわゆる「平成の大合併」には賛同せず、市町村合併をしなかった町である⁽⁵⁾。世帯数2,391、人口5,749人（平成18年3月現在）で、面積は161.39平方km、東西に18km、南北に10kmの町である。明治30年・同31年に屯田兵^{とんでんべい}が入植した町であり、現在でも屯田兵村時代の区画が残っている箇所が多く、屯田兵村の面影を残している町として名高く、畑作農業を基幹産業としている。

上湧別町には、平成8年に開館した屯田兵をメインテーマとする郷土博物館「ふるさと館 JRY（ジェリー）」（以下「JRY」という）がある。屯田兵をメインテーマとしつつも、町民を中心に広く資料の収集に努めており、また地元の学校との協働授業では、高い成果を上げている博物館である⁽⁶⁾。6,000人を割っている人口状況の中、博物館に専任の学芸員2名を配置していることから、その教育成果への期待の高さが伺える。

本研究で分析を行うツアーの実施は、以上の2つの町にある博物館等の文化施設を中心に行ったものである。

Ⅲ 事業内容

i 実施までの流れ

遠軽町及び上湧別町の博物館等施設については前章で述べた通りであるが、これらの施設が連携・協働して事業を行えば、より高い教育成果を上げることができるという考えが我々生涯学習・社会教育の関係者だけではなく、町民の有志にもある。

当然我々遠軽町内の各施設の学芸員においても、合併が決定した段階から連携・協働の方法についてしばしば議論してきたが、建設の背景や目的、取り扱うテーマなどが全く異なるので、どのような方法が最善なのか結論を見出せなかった。

そのような状況の中、町民の有志団体で構成しているクラスター研究会が立案した文化施設を中心とした事業モデルが、内閣府で公募していた「都市再生モデル推進調査事業」に採択されたため、600万円を上限とする補助金の一部を用いて、博物館のネットワーク化だけでなく、市場開発に精力的に取り組んでいるJTB北海道の市場開発室とタイアップして遠軽地域独自の体験学習を商品としたツアーの実証実験を実施する運びとなった。

各回の実施に当たっては、ツアーへの参加対象となる札幌及びその近郊住民の体験学習へのニーズの把握をJTB市場開発室が行い、逐一その情勢報告を受けながら我々遠軽地域の学芸員が協働で学習プログラムを組み立てていくというプロセスを繰り返し実施している。また2回目以降は、前回の問題点をJTB北海道と我々で分析して次回に活かしていくというプロセスを経ることで、参加者のニーズに極力応える体制作りを目指した。

ii 事業の概要

本事業は前節で説明した経緯を経て実施した事業であるが、事業の目的とすることは大きく分けて2つ挙げることができる。①「参加者にもたらされる学習成果」、②「受け入れる博物館等施設及び地域にもたらされる成果」である。

①は参加者が「旅行」として対価を支払って本事業に参加するため、当然それに見合うサービスが必要である。言うまでもなくそのサービスとは体験学習の成果に対してのサービスである。しかし、「体験学習をする」ということ自体が目的なのではなく、「どのような体験をし、結果としてどのような学習の成果があったか」まで突き詰め、参加者がどのような体験学習を求め、どのような成果を期待しているのか把握するように努めた。

②については、本事業は博物館における「経済活動」の成果だけを追うものではなく、また従来のような「教育活動」の成果のみを追うものでもない。本事業における我々施設側の大きな目的はこの2つを両立させることにあった。つまり、ここでいう成果とは、その経済活動と教育活動とが両立してはじめて「成果」と呼ぶことができるものである。

本事業は、札幌及びその近郊に在住する親子を対象に参加募集を行い実施した。子どもについては、事業の内容を考慮し小学中学年以上を対象とした。

各モニターツアーの概要は、以下の通り（表1～表3）である。

表1 第1回モニターツアー概要

「遠軽まるごと博物館」第1回モニターツアー	
実施日	平成18年10月28日（土）～同29日（日）
参加者人数	保護者6名・小学生8名（7組） クラスター研究会会員7名（事業補助）
受入施設	遠軽先史資料館、当館、キララン清里 ^{きよさと} 、丸瀬布 ^{まるせつぷ} いこいの森昆虫館
実施内容	28日 遠軽先 先史資料館にて遠軽町内の白滝遺跡から出土した遺物を見学、その後黒曜石による石器作り。後に当館に移動し、木のおもちゃ作りを通した木工体験を実施した後、館内にて当館収蔵の「茶運び人形」の実演会を行う。生田原地区の宿泊研修施設キララン清里にて夕食の後星空観察を行う（天候不順につき屋内にて星空講義）。 29日 午前9時30分頃に丸瀬布へ移動、前日作成した石器を持って丸瀬布「いこいの森」を探索。倒木から昆虫の探索等を行い、また自然に出来た風穴を見学体験した。昆虫館で昆虫の見学を行い、午後、同館にてまとめを行う。

表2 第2回モニターツアー概要

「遠軽まるごと博物館」第2回モニターツアー	
実施日	平成19年1月13日（土）～同14日（日）
参加者人数	保護者7名、子ども13名（6組） クラスター研究会会員9名（事業補助） 瀬戸瀬地区婦人会9名（郷土料理調理）

受入施設	昆虫館，瀬戸瀬温泉，当館
実施内容	13日 丸瀬布いこいの森周辺にて，かんじきを履いて冬の昆虫探しを行った。同時に冬期間氷結する「やまびこの滝」を見学させた。昆虫館に戻り，あらかじめ用意した昆虫の標本作りを行った。宿泊地瀬戸瀬温泉に移動後，瀬戸瀬地区婦人会の協力によって，郷土料理を夕食とした。 14日 当館にて，展示物を用いて「十二支」についてのセミナーを実施。十二支にまつわる神話等を紹介し，日本の伝統的価値観を学ばせた。木工房でいのししのおもちゃ作りを体験した後，からくり人形の実演を行い，木工の技術の知恵を体験させ，学ばせた。午後，まとめと質問の時間をとり，最後に各学芸員から冬休み自由研究へのアドバイスをを行った。

表3 第3回モニターツアー概要

「遠軽まると博物館」第3回モニターツアー	
実施日	平成19年3月24日（土）～同25日（日）
参加者人数	保護者8名，子ども8名（6組） クラスター研究会会員6名（事業補助） 瀬戸瀬地区婦人会9名（郷土料理調理）
受入施設	昆虫館，遠軽先史資料館，JRY
実施内容	24日 遠軽町のシンボリックな存在である「がんぼう岩」で，昆虫館の学芸員を指導者にチョウの卵探しを行った。その後，遠軽先史資料館でチョウの飼育講習と研究，1日目のまとめを行った。宿泊地瀬戸瀬温泉に移動し，第2回モニターツアー同様地元住民の協力を得て郷土料理を夕食とした。 25日 JRYで，展示を用いて旅，食，水，衣服，家作り等の先人の

	暮らしの工夫を見学した。昼食は「屯田食」と銘打った雑穀飯とし、日常の食の見直し、日本食の長所について学ばせた。その後、丸太を「とび」「がんだ」を用いて引っ張る「木遣り歌」を体験し、まとめと質問の時間をとった。
--	--

IV 事業分析

i アンケートによる満足度分析

本事業は、継続性を担保するためのモニターツアーという形で実施していることから、「I 研究方法」で述べた通り、利用者のニーズの把握や満足度調査、課題を明らかにするために全ての回において参加児童、保護者にアンケート調査を実施した⁽⁷⁾。

保護者に対しての調査では、事前と事後では以下のような変化が見られた。

遠軽に持っていたイメージはどのようなものですか？

- ・居住地から遠い ・自衛隊がある町 ・田舎なので人が優しい (2) ・遠い (2)
- ・田舎町 (2) ・雪が少ない ・木材の町 (2) ・自然の豊かなところ (2)
- ・J R の方向転換の場所 (2) ・何もないところ (2) ・高齢者が多い
- ・圏外が多い ・星がきれい ・空気がきれい ・台風、津波 ・オホーツクの街
- ・鉄道の通る町 ・山に囲まれている町 ・あまりよくわからない
- ・山の中の素朴な感じ ・小動物と共存 ・晴れの日が多い
- ・がんぼう岩、湧別川オホーツクフィッシング、クロスカントリーが行われている所
- ・暗いイメージ ・合併した町

参加して新たに知った遠軽の情報やイメージはありますか？

- ・昆虫館やちゃちゃワールドが思っていたよりテーマがあり、しっかりしていた事 (2)
- ・他の人にももっと知って欲しい
- ・遠軽の子供達が生き生きしていた ・滝に感動しました
- ・自然がすばらしい所 ・家庭料理 ・人の温もり
- ・木材、昆虫等、自然の教材、セトセ温泉がよい泉質だと知り、また行ってみたいと思いました。
- ・学芸員の方を代表に素晴らしい人材を多くかかえている

- ・瀬戸瀬温泉が良泉である事を知った ・高速道路のおかげで思いのほか近かった
- ・充実した施設、先生がいる。子供達に知ってもらいたい
- ・学芸員の方々を身近に感じた
- ・北海道らしい広い大地をより良い使い方をしようとしている意気込みを感じた
- ・思っていたより大きな町で駅も大きい
- ・町おこしに熱心な方が多いと感じました ・寒い所なのに蝶が住んでいる。
- ・昆虫が多く生息し、アイヌ文化や屯田兵など歴史のある所。地元の方々が助け合い生活し、暖かい心を持っている

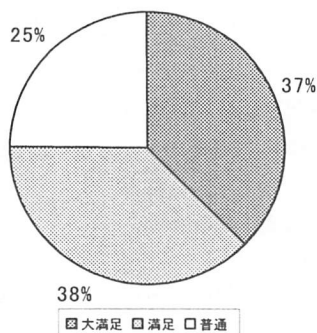
ここでは、当初保護者が抱いていた遠軽に対する「田舎」「何もない」「居住地から遠い」等のマイナスのイメージを、事業に参加することによって新しい発見をし、プラスイメージに転換するきっかけになったことが伺える。

次に、参加児童に行ったアンケートについてであるが、いずれもそれぞれの施設における活動内容に即した細かな質問を設定したが、本稿では満足度に関わる部分のみを掲載する。これについては、「大満足」「満足」「普通」「つまらなかった」の4段階の回答で捉えた。

第1回ツアー

サンプル数 8 名 有効回収率100%

今回のプログラムに参加してどうでしたか？

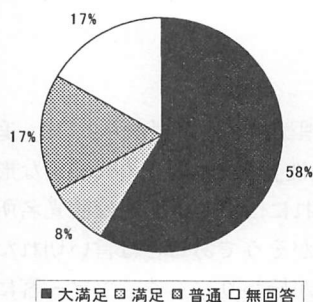


第1回ツアーでは、その回答は見られず、参加した児童の4分の3が満足したと答えている。普段触れることができ、また自然を体験できたというのが大きな理由であろう。しかし、遠軽町内の全ての施設で事業を行おうとしたため、時間的な無理が生じたことが反省点となった。

第2回ツアー

サンプル数12名 有効回収率100%

今回のプログラムに参加してどうでしたか？

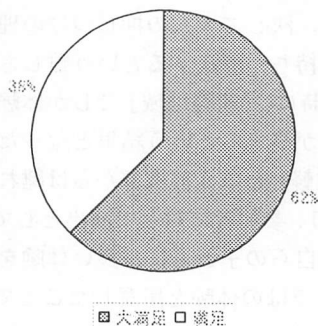


第2回ツアーについても、66%という高い満足度を示す結果となった。第1回ツアーの反省点を生かし、丸瀬布昆虫館と当館を活動のメインとして、そこにフィールドワークを取り込んだ。また、遠軽町内の子どもたちとの触れ合いの機会を作ったことも、「都会」の児童と「田舎」の児童の出会いの機会を作ることにつながり、高い満足度の要因の1つとなったと考える。

第3回ツアー

サンプル数12名 有効回収率100%

今回のプログラムに参加してどうでしたか？



第3回のツアーについては、当館は参加せず1回目・2回目に参加しなかったJRYが実施館として参加した。屯田兵の生活体験という新たな試みであったが、これも高い満足度が現れており、全3回を通して遠軽地域にある施設での活動は高い満足度を引き出せる結果となった。

保護者については、遠軽地域のマイナスのイメージをプラスのそれに変えることに成功したと言うことができよう。

また児童の満足度についても概ね高かったと読み取ることができる。

遠方へのツアー参加は、当然のことであるが家庭では保護者が決定権を持っているので保護者のイメージがプラスのものになったということは重要なことであるが、自らの子どもや孫と行動を共にする場合、その児童が満足するものに参加したいという意思が働くので、児童の満足度が高かったということは、このツアーに参加する保護者の動機として重要な意味を持つものである。

ii 教育的効果

現在我が国における観光は、従来の「娯楽性」追求型から、「知」追求型へのパラダイムシフトの最中にある。「娯楽性」追求型観光の代表的な形態として安価な団体ツアー等が挙げられる。これについては例えば観光名所や旧跡を巡るツアー等があるが、もちろん全てがそうであるとは言いきれないが、この形態では観光対象物の本質的な価値が伝わりにくく、ツアー客にとっては、観光が発展的な発見・気づき等の機会となり得ないという状況にある。「知」追求型の観光へと変わりつつある現在は、その形態も団体ツアーから個人もしくは家族単位の旅行へと変化している。

本事業はそのような現状の中、言うまでもなく、「知」追求型の観光を求めているマーケットに対し、自然環境や教育的価値の可能性を検討し行ったものである。前節のアンケート結果の通り、参加児童の学習意欲の向上が見られた。つまりこれは、本事業で体験する理由、学習する理由を見つけさせることができた結果であったと考えている。決して大人の押しつけの理由ではなく、子どもたち自身が発見し、興味を持ち、解決するという難しさと楽しさを提供できたと考えている。そして同時に、「遠軽地域」でしか体験できない内容を用意することで、当地方の価値が高まるという結果となった。

また、参加した保護者に対しては、「遠軽」という都市部からは離れたいわゆる「田舎」で事業を実施することにより、参加者に対して演出としての「非日常」をサービスすることもでき、かつ自らの子どもに「良い体験をさせたい」という希望に対しては、「田舎」ならではの体験を用意したことで、高い満足度を示す結果となった。

iii 経済的效果

全国各地の博物館等の施設は、現在建設当初の予想通りの収益を生み出さず、存在自体が危ぶまれている状況にある。賛否両論の中、多くの施設が指定管理者制度導入へ経営方針の転換を余儀なくされたが、事実上は博物館のおかれている状況を打破することにはつながっていない⁽⁸⁾。新たなハード面での投資など、集客に繋がる話題を提供することも有効な手段だろうが、実際には資金の確保の問題やそれを回収するだけの集客が見込めないのが現状である。

遠軽地域の博物館等施設もこの例に漏れないため、「経済活動」と「教育活動」とを両立させることで、遠軽地域の博物館等施設の置かれている現状を打破できるのではないかという考えで実施した本事業における経済的效果であるが、本事業において遠軽地域にどれ程の経済的な効果があった(都市部のお金が遠軽地域に落ちた)のかを以下にまとめた(表4)。なお、活動にかかる必要経費、例えば、当館で行った木工体験の材料費、昆虫館で行った「昆虫標本作り」の材料費、上湧別町ふるさと館 JRY で行った屯田食の調理試食体験の食材費等は全て地元で購入・調達しているため、これも「地域の収益を上げる」という博物館の複合的経済活動として捉え、これを除かずに収益を算出した。

表4 本事業における経済効果(料金等内訳表)

	参加者内訳	宿泊費	食費 (材料代含む)	施設使用料 (材料・資料代含む)	計
第1回	保護者6名	18,000	48,000	16,200	163,000
	児童8名	17,600	48,000	15,200	
	(保護者1人当り)	3,000	8,000	2,700	13,700
	(児童1人当り)	2,200	6,000	1,900	10,100
第2回	保護者7名	35,000	28,000	17,500	207,900
	児童13名	65,000	39,000	23,400	
	(保護者1人当り)	5,000	4,000	2,500	11,500
	(児童1人当り)	5,000	3,000	1,800	9,800

第3回	保護者8名	40,000	32,000	8,000	150,400
	児童8名	40,000	24,000	6,400	
	(保護者1人当り)	5,000	4,000	1,000	
	(児童1人当り)	5000	3,000	800	

本事業は、試験的なモニターツアーとして実施したので、参加者から徴収した料金は1人当たり一律5,000円とし、不足の部分はクラスター研究会の補助金からの補填を行った。ツアー全体の合計は表4の通り約150,000円から約200,000円である。その都度活動内容や食費などが違うため差が出ているが、最低でも1回のツアーを受け入れるとおおよそ表4の収入が遠軽地域に入ることとなる。さらに利益を上げようとするのであれば、参加料に上乗せして純利益分を徴収することも可能であるが、そこまでの経済的負担を参加者へ負わせることはないと考えている。

ツアー参加料もこれに合わせて設定することとなるが、遠軽地域の収入にならなかった部分として、バスチャーター料金、外部専門業者によるワークシート作成料等が加算され、また企画運営に加わるJTB北海道へのマージンも発生するため、それらを加算し1人当たりの参加料を決定することとなる。JTB北海道市場開発室は1人当たりおおよそ20,000円の参加料でも十分に参加者を集めることができるという見解を示している⁽⁹⁾。

本事業の収入だけを見れば、単独のツアーでの収入は決して多いとは言えないが、サービスの低下を防ぐために参加者数を制限することは止むを得ないことであるので、定期的にツアーを受け入れることによって利益率を上げていくという方法で補うのが最善の方法であると考えている。

おわりに

以上、当地域で実施した「学芸員がフィールドへ飛び出した・遠軽まると博物館」の事業について分析を行った。アンケート結果で見られる通り、今回の事例については多くの参加者が高い満足度を示している。これは我々

が実施した事業は、商品価値が高いものとして受け入れられたということであると解釈している。

加えて、「娯楽性」追及型から「知」追求型へのパラダイムシフトをしている我が国の観光形態にも、対応できるものと判断している。そして、博物館施設がネットワーク化することで内容の濃い体験型学習を提供することができ、参加者を飽きさせることなく時間を費やすことができたことから、この事業が遠軽地域の滞在型観光の1つの形態となり得ることが立証された。

しかし、もちろん問題が無い訳ではなく、むしろ本事業の継続を担保するためには解決しなければならない課題が見えてきたのも事実である。前述したが、体験学習を商品としている特性上、受け入れ人数には限りがあり、事前の準備等の時間や労力に比べると、1回のツアーでの利益回収率は低いものとなった。これについてはサービスの低下を防ぐために、ある程度許容すべきことではあるが、継続性を考えれば労力だけが増していくという状況は避けなければならない。

また、本事業においては地元住民の参画も、郷土料理を参加者に伝授し振舞うという形で行われた。これについては「喜んでもらえてうれしい」「また来てもらいたい」等のコメントがあったことから、参加者がやりがいを実感し地域に活力を与える相乗効果を生み出す結果となったが、これについても負担ばかりが大きくなならないよう、地域住民を事業主体の中に組み入れ、事業の立案時から協働で実施していく必要があると考えている。

以上のことを踏まえ、遠軽と札幌という離れた場で活動する我々博物館等施設とJTB北海道が協働で事業を継続実施していくためにも、無理なく実施できるシステムを構築し、定期的にツアーを実施していく基盤作りが必要である。定期的に当ツアーを実施すれば、利益回収率は高いものとなり、また地元の参加者へ定期的な生きがい、楽しみを提供できることを考えても、早期にシステムを構築する必要がある。

博物館における経済活動と教育活動を両立していく方法のひとつとして、本事業の改善工夫を図りながら、継続的に発展させていきたいと考えている。

注

(1) 平成10年に開館した当館は、世界の木のおもちゃをメインテーマとしたテーマ

パークである。博物館としての登録はなされていないが、展示活動や体験学習など博物館的要素が非常に多いことから学芸員として筆者が配置され、町内では博物館という狭義の意味ではなく、広義の意味での「ミュージアム」としての認知がされている。

- (2) 塚原正彦：デイヴィット・アンダーソン『ミュージアム国富論』日本地域社会研究所，2000年
- (3) 現在の遠軽地域は5月初旬から6月中旬まで開催される上湧別町のチューリップフェア、遠軽町のコスモス畑は8月下旬から10月上旬に見所を迎え、この双方が遠軽地域の花の観光を支えている。その他観光施設があるが、宿泊を伴う程の規模にはなく、遠軽地域全体は通過型観光地として認知されている。現在、観光客が遠軽地域で1泊以上の時間を過ごす滞在型観光への発展が目指されている。
- (4) NPO法人NPクラスター研究会は、本部の事務局を紋別市に持ち、遠軽と紋別地区社会の産業活性化と社会環境の整備に関する事業を行い、同地区の再生・創造に寄与することを目的に設立された特定非営利活動法人である。湧別川流域研究部会は、遠軽地域に関して専門的に上記の事業を行う部会である。
- (5) 当初は湧別町、上湧別町、佐呂間町の対等合併を目指し合併協議会で協議がなされていたが、平成17年2月20日、湧別町の住民投票の結果で否決され、成立しなかった。
- (6) 上湧別町ふるさと館J R Yの教育活動については、筆者は地元の高等学校との協働事業に注目し、以下の2つの研究において分析を行っている。
 - ・牧野祐也「博物館における学社融合研究の可能性～上湧別町ふるさと館J R Yを事例として～」(『上湧別町ふるさと館J R Y研究年報』3.2004)
 - ・牧野祐也「学社融合の基礎的研究～博物館における事例研究から～」(『札幌国際大学学生懸賞論文集』24.2005)
- (7) 本事業のアンケート調査は、参加した保護者・児童全員を対象に事前事後の2回実施した。事前調査については、博物館に対するイメージ、遠軽地域に対するイメージ、参加した目的を把握するための内容とし、事後調査については、事前調査と比べてどのように考え方やイメージが変わったのかを把握すると共に、各施設の活動が参加者どのように捉えられたのかを把握する内容とした。いずれも質問紙を配布し、それを回収する方法をとり、事前調査については1日目に配布しバス内で行い、事後調査については最後に活動を行った施設のまとめの時間及びバス内で行った。
- (8) 博物館等の文化施設に限って言えば、現在の多くの指定管理者は、その施設を管理する専門の財団やNPO法人を新たに設立し指定を受けたり、また以前から管理

運営を行っていた団体がそのまま指定を受けるなど、運営上大きな変化は見られないことが現状を打破し得ない状況を作り出しているという考えもあるが、本稿の特性上その議論は行わなかった。

- (9) 3回目のツアー終了後、今後に向けて JTB 北海道市場開発室、クラスター研究会会員、遠軽地域の学芸員が反省会を行った。その中で1人当たりの参加料について、本事業を担当した JTB 北海道市場開発室プロジェクトディレクターの菅野剛氏は、ツアーの規模、内容、かかる費用等を鑑みて 20,000 円から 25,000 円が妥当であるという見解を示し、検討した結果その金額が妥当だという結論に至った。